
truth ~ 工藤新一の試練 ~

門無 澪姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

truth（工藤新一の試練）

【コード】

N0562H

【作者名】

門無 澪姫

【あらすじ】

とつとつ黒の組織との対決！あの方の正体が明かされる…。工藤新一視線、毛利蘭視線でそれぞれ描かれるストーリーをどうぞお楽しみください。会話が比較的多いです。

真実への一歩

「もぉー！全然電話くれないから心配してたのよぉ？」

「ああ、わりいわりい！じ…！」

「事件が山積みなんですよ？もうそのセリフ聞き飽きたわよ！」

「ははっ。仕方ねえだろ？事件は俺をまっちゃくれねえんだからよ
！」

「はいはい！いいからたまには顔出しなさいよ？」

「わあってるよ！んじゃあな！」

「ちよっ！切れちゃった…！」

小さな名探偵、江戸川コナン。

高校生探偵工藤新一がその正体だ。

本当はずっとそばにいるのに電話越しに本当の声を聞かせるのが精一杯な伝えきれないこの思い…

蘭…いつかぜってえ…

あいつらとの勝負にけりつけて、本当の姿でおめえに思いを伝えるから…

「っていつてもあいつらの情報…最近はめつきり途絶えちまったなあ…」

探偵事務所の階段を昇りながら呟く無意識な独り言。
昇りきってドアに手をかけた。

「なんや、さすがの名探偵もお手上げなんか？」

真実への招待状

ほなさつさとあの姉ちゃんにホンマのこと伝えてあげたらええんと
ちやう?」

バリバリの関西弁…

(まさか…)

「服部!なんでお前ここにいんだよ!」

「まあまあ、最近工藤とおうてなかったさかい寂しなって、ちいと
顔見に来たんや!」

「はあ?…とりあえず中入れよ」

カチャ…

「ただいま…って蘭姉ちゃんどうしたの?」

「え、ううん!なんでもない!服部くんどうしたの?」

「あ、あぁちいと遊びに来てしもうた!ははっ」

(蘭のやつドアのすぐ隣でなにを考えていたんだ…?)

「ご飯の支度を始めるなにか動揺したような蘭…

「んで?本当はなにしに来たんだよ?」

「せっかく会いに来たのになんや冷たいなあ」

「前もってなんの連絡もなく急いで来たってことは大事な話があるんだろ？」

「ちやうで？あのちっこい姉ちゃんから『工藤君を助けてあげて』って連絡が入ったんや。なんや工藤も知らんのか？まあさっきの独り言は手紙まだ読んでないっちゆうことやな」

「手紙？あ！すっかり忘れてた！」

コナンの机の上に乗った封筒…

工藤新一様

突然に手紙を出すご無礼を
お許しく下さい。

貴方が真実に辿り着くこと
はないと思っておりましたが、
さすがは名探偵、我々は
甘く見すぎていたようです。貴方が真実を掴むまであと
一步…

つきましては満月の夜に
杯戸港10番倉庫前
にて貴方をお待ちして
おります。

また、貴方様のご意志に

関わらず大切な人の命は
ここで果てることになる
でしょう。

真実と決意

「なに？」

「工藤、どうゆうこっちゃ？それに大切な人って…」

（大切な人……）

「…蘭に決まってるだろ…」

あいつらに正体がバレたのかもな…フッ」

「なに笑うてんね！大変なことやぞ！」

「…上等じゃねえか！蘭は俺が守ってやる」

「…姉ちゃんは？」

「さつき出て行く音が聞こえたから多分食材買いにいったら。」

「一人にして大丈夫なんか？」

「さあな…満月の夜は一週間後だから今日なんか起こることは考えにくい…なんで灰原のやつ、未開封の手紙の内容知ってたんだ？」

「ああ…なんか『悪い予感がするのよ』とは言っとったな」

「そうか…」

考え込む新一だったが本当は分かっていた。

どうにもならないことを…。

(行ったって行かなくなったって直にあいつらの手は俺に…俺の仲間に…蘭に…)

「ま、とりあえずあっちに戻るっや!」服部に連れられコナンの部屋から居間に戻る…!

「蘭姉ちゃん買い物行ったんじゃなかったの?」

「さ、さっき帰ってきたの気づかなかった?」

「う、うん…」

(いや、蘭は出かけてねえ…外はドアの音がしてからちよっとたつてから雨が降りはじめたのに玄関も靴も濡れてない…第一冷蔵庫の中の食料が増えてねえしな…)

「服部…」

「ああ…姉ちゃんなんか隠してるで…」

ヒソヒソ話す用心深い声はだんだん強くなる横殴りの雨によってかき消された。

「工藤、どうするんや?行くんか?」

「バー口…行かない訳にはいかねえだろ?蘭に気づかれずに見張るには限界がある。だったらやつらは確実に蘭を連れ去るだろうしな…」

「そりゃそうやな。でもその姿で行くんか？」

「そうなんだよなあ……」

（小さい姿で行ったってあいつらはもう知ってるみてえだからいいが、蘭が……）

「蘭……」

真実への疑惑

「俺今日からちよっとの間泊まってもかまへんか？」

「えっ？」

素っ頓狂な蘭とコナン、二人の声が同時にした。

「いいけど…」

………

(満月の夜は明日…)

「コナン君、買い物行ってくるね」

(…このまま一人にしちやまずいよな?)

「蘭姉ちゃん、僕も行くよ!」

「コナン君は宿題があるからダメよ!」

カチャッ

(…やっぱり蘭のやつ、俺を自分から遠ざけようとしてやがる…)

コナンの心に不安が広がっていった。

なにか締め付けられているような…
もうこのまま会えなくなってしまうような嫌な予感がした…

その日、蘭は帰って来なかった。

おっちゃんは捜索願を出したみたいだ。

一見冷静そうなコナンと平次だったが、胸の奥では怒り、悲しみ、
情けなさ…

よくわからない感情が入り混じって結果無情になっているだけだった。

「…まさか!」

コナンの頭をよぎる真実の鍵…

「工藤、なんか分かったんか?」

「満月の夜…真実を確かめに行く日には最適ってわけだ…」

「…は?」

「だけど…なんで…」

……………

く 決着の日く

「おじちゃん、ちょっとでかけてくる!」

「おまえ、蘭が大変な時になあにいつてんだあ!」

「…ああ…だからこそ行くんだよ…」

「はあ？」

「行ってくる…」

少し寂しげなコナンの顔…

「違うよな…まさかな…」

真実の月光（前書き）

ここではコナンの身近な人物がボスとして登場します。ボスは正直誰でも良かったので一番書きやすい人物を選ばせていただきました。

真実の月光

.....

杯戸港10番倉庫前

コトツコトツコトツ

足音が響き渡る...

「...本当に来るとはバカなやつだな。来たら大切な人を守れるとでも思ったのか？」

低い男の声がこだました。

14

お互いにまだ顔は見えていないが、気配からして一人であることをコナンは察した。変声器を震える手で口元に運んだ。

「漆黒の闇で満月の光が導きだす真実つて訳か...」

...途中まで言いかけて肩の落とす...

そして再び変声器を口元に運ぶことなく...

「もう遊びはやめだ。なあ？父さん？」

雲間から射す光によってお互いの顔は十分すぎるほどに照らされた。しばらくの沈黙は新一だけではなく三人の胸に重くのしかかった。

「…フツ…さすが我が子…やはり真実の扉を開いていたのか。さあその推理を聞かせてもらおうか。」

「他のどんな難事件も所詮人間が考えたトリック。解けないことはなかった。だけど組織についてはどんなに考えでも…

そんな時に嫌な考えがよぎったんだ。

組織はまるで父さんのようだなんて…

俺は探偵として父さんにだけは適わなかったからな。」

………

「そんな訳ないって思ったが…だが胸を締め付ける疑惑は晴れなかった。だから父さんじゃないって…そうじゃないって証拠を見つけようとしたんだ。」

「そうしたら私であるという証拠が揃ってしまったということか？」

「証拠って訳じゃない。辻褄があったただだよ。だからここに確かめるために来た……なんでだよ？」

「お前に最大の試練与えた…と言ったところかな。ジンが私の息子とは知らずにお前にあの薬を飲ませたのは誤算だったが、まあお前

にはいい腕ならしになっただろう。」

「んなこと聞いてねえよ！俺が聞いてえのはなんでこんなことしたのかってことだ」

「…いつかお前にも真実を知る時が来るさ。だが今はまだ若すぎる。お前が私を超える時がその時だ。心配せんでも必ずやってくる。お前なら…」

「父さん、俺…」

「もうお前は正体を隠す必要ない。組織は私の正体がバレれば滅びる。お前の勝ちだ。あとはじっくり組織の実態を解明すればいい。解毒剤もどうやらシエリーが完成させたようだ。」

「なにい！？」

「この子も最初から殺す気は無かったしな。」

「蘭！」

蘭に走りつけたその隙に優作は姿をくらし、二度と目の前に現れることはなかった。

真実の月光（後書き）

組織の目的までは書かない方がいい気がしたので延ばしました。

真実の告白

「大丈夫か？」

口をふさがれ、手を縛られた蘭は必死に抵抗したのだろう。その痕跡は痛々しく、真実と共に二人の胸につきささった。

縄ほどいた途端、蘭は小さな新一に抱きつきしばらく離さなかった。

「新一！新一！」

「やっぱり気づいてたんだな…通りで様子がおかしいと思った…」

「新一…やっと会えた…」

「わりいな…ずっと待たせて…」

「寂しかったよ…なんで教えてくれなかったの？」

「バー口…おめえみたいなお人好しに言えるかよ。」

「…クスッ」

「なにがおかしいんだよ？」

「いや、口調とか仕草とかは新一なのに声と姿はコナン君だからなんか変な感じがしただけ！」

「俺だって好きでやってんじゃねえよ……もうすぐ、もうすぐで工藤新一に戻るから……だからあとすこしだけ待っていてくれないか？」

「新一……」

「コナン」新一であることは他の人にはまだ言わないことになった。

……

阿笠邸

「博士ー！」

「こんな時間にどうしたんじゃ？ おお！ 蘭君も一緒なのか！」

「あら、工藤君……無事に帰ってこれたみたいね……」

「ああ……」

「お、おい！ 哀君、蘭君がいるんじゃよ？」

「もう隠す必要はないみたいよ？」

「はあ？ じゃあもしかして……ええええ……！」

「博士も哀ちゃんも知ってたのね？」

「ええ」

「組織に狙われる可能…」

「ないよ。」

コナンは今日起きた全てのことを話した。意外にもコナンの中で心の整理はついていたらしく、口から流れるように言葉が出た。悲しいほどの真実が…。

「んじゃっ！今日はこれで帰るよー！」

「じゃあね、工藤君」

ドタンッ

「…新一、悲しくないの？」

「不可能なものを除外していつて残ったものがどんなに信じられなくてもそれが真実なんだよ」

「…そう…」

蘭は納得いったわけではないが、それ以上何も聞かなかった。蘭の沈黙が新一の心を暖かく、優しく包み込んだ。

毛利探偵事務所についた蘭は小五郎のおっちゃんに精一杯の嘘を、コナンは服部に真実を話したのだった。

真実と惜別（前書き）

今更ですが、タイトルは無理やりにつけているので気にしないでや
ってください笑

真実と惜別

.....

翌朝、帝丹小学校

「えー！コナン君転校しちゃうのおお？」

「どうしてですか？」

「どこいつちまうんだよ？」

コナンはクラス全員に囲まれて質問責めにあつたのだった。

親の転勤で海外に行くというベタな理由だったが小学一年生には疑う余地もなくむしろ海外という響きへの憧れからか羨ましいという声も聞こえた。

（すまねえが今は嘘をつくしかねえんだよ。真実を話すのはもう少しおめえらが大きくなった時に…）

…真実…

コナンの頭にその言葉が、闇に差す光…あの情景が浮かび上がった…

（父さん…）

放課後、コナンの机の中、下駄箱にはコナンの転校を知った女の子

達のラブレターがどっさり詰まっていた上に直接告白する子に囲まれて中々家路につくことができなかった。

そのモテモテっぷりは蘭が嫉妬するほどだったらしい…

江戸川コナンとして過ごす残り時間は一週間…

少年探偵団に刑事さんやおっちゃん、園子に別れを告げ…

博士、灰原、服部、蘭にもコナンとして別れを告げるには時間がいくらあっても足りなかった。

高校に復学決定の知らせが広まると、クラスのみんなは浮き足立ったように工藤新一の帰りを待った。

………
一週間後…

「コナン君…ヒクッヒクッ」

「本当に行ってしまうんですね…」

「俺、寂しくてご飯二杯しかおかわりできなかったぜ」

「十分だろ？それに歩美ちゃんも泣くなよ。月に一回は手紙だすからよ」

「本当ですか!？」

三人の顔は一気に輝きを増した。

「ああ…もう会えないからな…」

「そんな寂しいこと言わないでくださいよ!…」

「そうよ!…」

「ああわりいわりい!…」

真実と最期（前書き）

このシーンは結構気に入ってます。他の部分に比べ若干長いですが是非読んでください！

真実と最期

「江戸川コナン、大人気ねえ…」

「…そういえばおめえはどうするんだ？」

「しばらくは灰原哀を楽しむつもりよ。今の方が宮野志保よりも輝いているもの。だけど、いつまでも逃げるわけにはいかないわ。気が済んだらその時はどんなに辛くても宮野志保に戻って自分に向き合う。そして新たな人生を歩むつもりよ。」

「…おめえも変わったなあ…」

「え？」

「いや、前は組織から、自分自身から逃げてたお前が自分と向き合うなんて変わったなあと思っただけ？」

「あら、褒めてくれてるの？ありがと。」

(相変わらず可愛くねえな…)

「今日は博士の家に寄って来なさい。蘭さんも呼んであるから。」

「あ？…ああ分かったよ」

「あら、意外に楽しみにしてないようね？」

「いや、そんなことねえよ。ただ、江戸川コナンと俺自身もお別れ

なんだなあって思ってたな。「」そう。。。。どうする？今日はせめとく
「？」

「いや…頼むぜ」

「分かったわ。」

.....

阿笠邸

「おかえりー！哀ちゃん、コナ、じゃなくて新一！」

「いいよ。俺はまだ江戸川コナンだから。」

「そう…でもいよいよね。…その前に一つ質問していい？」

「ん？」

「哀ちゃん…なんで新一の正体知ってたの？」

「あれ？言ってなかったか？俺と一緒にだよ。本名は宮野志保って
うんだ。」

「コナンは言うのはここまでにしよとしたが、灰原は全てを話した。
組織の中にいたこと、10億円強盗の真実と姉のこと、これからの
こと…」

「そうだったのね…ごめんなさい。」

「灰原…大丈夫か？」

「あら、心配してくれてるの？」

「ははーっ。どうやら大丈夫そうだな。」

「それよりこの薬…」

この薬を飲めば体は戻り、永久に江戸川コナンには戻らないわ。」

「そうか…この薬で…」

「新一に戻るのね…本当にいいの？」

「真の姿に戻らなきゃ新たな一歩は踏み出せねえ…」

プスッ

「あっ…」

コナンは麻酔針を蘭に打ち込んだ。

「わりいな蘭…コナンの最期をお前に見届けられたら…工藤新一に戻れなくなっちゃうからな。」

「新一…」

蘭の寝言はコナンに、一歩踏み出す勇気をくれた。

「工藤君…あっちの部屋に着替えとか置いてあるから…落ち着いたら出てきなさいね」

「…いろいろありがとな…」

カチャッ

「バイバイ、江戸川コナン君…」

小さな背中を見つめる博士と灰原…

ボタン！

何も告げず、そして一度も振り返らずにコナンは手を軽く振った。ただ扉の向こうに消えていった。

真実の再来

もうコナンに迷いはなかった。

「今までありがとな、コナン…んじゃ！」

自分自身に別れを告げてからは躊躇することなく解毒剤を口に運んだ…

…ドクッ！

(この感じ、間違いねえ…)

ドクッ！ドクッ！ドクッ！

「ハアハア…ハアハア…」

シューッ

いつもと同じような苦しみ…

子供が大人の体になると普通の何倍もの速度で成長してるのだからそのエネルギーは底知れない。

コナンから新一になるうとする体は体力を奪われ続けた。

そんなことも想定内だったらしく、灰原が用意したものは衣類にとどまらず、タオル、大量の水分などまさに備えあれば憂いなしとでも言ったところか。

「…ハア…どうやら、落ち着いたみてえだな…」

服を着替えてから鏡の前に立った。
何度か経験しているからか体が戻ったことに関しては大した感動も無かった。

むしろ、江戸川コナンとの永遠の別れの方が彼には大きなことだったらしく、鏡に映る自分がもう二度と江戸川コナンになることは無いのだと考えて感慨深い表情を浮かべた。

「…久しぶりだな…工藤新一…」

体が伸び縮みするなんてホント夢物語だよなあ。」

ドアの向こうで待っている灰原、博士、そして眠っている蘭の元に戻るタイミングが掴めず、しばらくドアを見つめていたが覚悟を決めたかのように新一は飛び出していった。
広い未来へと…

「久しぶりね、工藤君？」

「よく帰ってきたのお、新一」

「ああ！ただいま！」

そうやって新一は周りを見渡した。そこには小学校一年生のコナンの目線とは全く違う世界が広がっていた。

「なんか…ちつちええ時から見てる風景なのに違うんだよなあ…」

「それでもなーんにも変わらんよ。この部屋も新一の帰りをずーつと待ってった。」

「…そうだよな。」

言い終わる前に新一は足をスヤスヤと眠っている蘭にむけて動かし
た。

「蘭…待たせたな…」

ずっと見つめていた天使のような寝顔…

「博士！今日は夜遅いから探偵事務所まで乗っけてってくれねえか？こいつ運んだら俺も家に帰るよ。」

「あ、ああ分かった。」

博士の愛車、ビートルに蘭を乗せて出発した。

真実の友情

毛利探偵事務所

「よし、着いたぞ。」

「…ここが江戸川コナンの原点であり、工藤新一の再出発地点ねえ…華がねえよなあ^^;」

「まあまあ、そんなこと言つでない。再出発地点じゃが、ここでの生活も終わりだからのう…」

「ああ…」

こんな夜遅くだからいつもなら電気は消してあつて窓も締め切つてあるはずなのだが、小五郎のおっちゃんは帰りがあまりにも遅い蘭とコナンを、服部は元の姿に戻つた新一を心配しているのだろう。まだ明かりはついていて、窓が開け放たれているため、「毛利探偵事務所」の文字が所々重なつて見えない。

「それにしてもいつになつたら服部は帰るんだよ!」

「新一のことが心配なんじゃよ。」

「…おっちゃんや探偵団のみんなにまた嘘ついちまつたな。」

「嘘も方便つて言つじやる?みんな分かつてくれる。それにいつか本当のことを言えばいいじやるう。その時には笑い話になつとるよ。」

そう…彼らにとってコナンとの別れは明日の朝なのだ。だから小五郎はまだコナンの帰りを待っている。

「蘭くんも疲れとるじゃろう、起こさんようにゆっくり運んであげるんじゃぞ?」

「わあってるよ」

そう言って新一は蘭の体を優しく持ち上げお姫様抱っこをしながら階段を登っていった。足音に気づいた服部がいち早く登場した。

「くど…」シートという声も出さずにアイコンタクトをした新一を見てとつさに口を手でふさいだ服部。

そのまま三階の居間を通り過ぎて蘭の部屋に着き、ベッドに寝かせる。布団を綺麗に被せてからやっと一言、今にも風にかき消されそうなかすれた声で

「おやすみ」

とだけ漏らし、部屋を後にした。

その様子を見守った服部の表情は緩み、無意識に笑顔になっていた…。

「…やっぱりお前、コナンの姿のほうが似合ってたんとちゃう?」

「バーロ!せつかく元の体に戻ったのによ」

「冗談や、冗談!…よく帰ってきたな、工藤。」

真面目な顔になった服部を見て少し驚いた様子の新一だったが、すぐに満足げな笑みを浮かべ、

「ああ！」

と一言言って、少し服部と話した。

「そついやおつちゃんは？」

「疲れてるみたいや。沖野ヨーコのドラマ見てる途中で寝よつたで。」

そつ言いながら服部は指で下の階の事務所を指した。

「そつか。服部、おめえどうする？」

「明日帰るわ！工藤の姿見れたらもうこっちに用は無いな。」

「…ありがとよ。心配してくれて。」

「な、なにいつとんじゃ。…親友なんやから当たり前や。」

「親友」という言葉が服部からでてくるっは夢にも思わなかった新一は目を見開いた。

「なに驚いとんねん！」

「い、いや、なんでもねえよ」

なぜか少し恥ずかしくなった新一は頭をポリポリ掻きながら、

「親友…か。いいもんだな。」

「なに言つとんねん！」

少し照れている二人だった。

「俺は事務所の方の戸締まりとかしたら家に戻るよ。下に博士のビートル着けてるし。おめえも俺んち泊まってけ。」

「ああ。ほな、俺が下行ってやってくるから、工藤は手荷物まとめとき。」

「分かった。頼むよ」

準備を整えた二人は下に行き、ビートルに荷物を乗せて、やっと夜になった毛利探偵事務所をじっとみつめた。新一が気が済んだ所でビートルに乗り込み、新一の家に向かった。

真実と夢想（前書き）

遅くなりました（^^^・:）コメントくれると嬉しいです！

真実と夢想

「博士、夜遅くまで付き合わせて悪かったな。」

「わしなら大丈夫じゃよ。新一も、体力消耗しとるから無理せんで休むんじゃよ」

「ああ。おやすみ」

小さくなくても大きくなっても新一に対する愛情は変わらない博士…そんな博士に新一は言葉には言い表せないほど感謝していた。

.....

工藤邸

「ほんま、ごつつひろーて不気味な屋敷やなあ」

「不気味、は余計だよ。まあ俺自身ここに帰ってくるのは久々だし、誰も住んでねえからすげー埃被ってるかもな。喉、気をつけるよ？」

「どんくらい来てへんのや？」

「かれこれ…半年以上は来てねえなあ」

「はあ…マスク持ってくるんやった」

「後悔しても遅いぜ、浪速の名探偵くん？」

平次はシド目で新一を見た…いつもと違って視線は下ではなく横に。

「とりあえず、入るぞ。寝室くらいはためえが風呂入ってる間にも掃除しとくからよ。」

「はいはい」

中に入った途端、埃を警戒していた二人は目を丸くした。

「「え…？」」

「なんでや？」

それもそのはずだ。半年使われていなかった屋敷とは思えないくらい綺麗なだったのだから…。

「…フツ…そういうことか…」

「なんや？」

「蘭だよ。あいつ最近おっちゃんが寝た後こっそりどっか行ってたみてえだから変だとは思ってたんだけどよ。…ありがとな、蘭。」

一通り説明したあとの新一の独り言を聞き、

「なんや、妬けるやないかあ！ほな、風呂借りるで〜」

そう言ってお風呂に向かったのだった。

その夜、平次、新一、二人の名探偵はリビングにある2つのソファ
―でそれぞれ夢に落ちていった。

蘭とおっちゃんもそのまま朝を迎えたのだった。

真実の相愛（前書き）

えー…自分でも突っ込みどころ満載なのですが、急いで書いたので許してください。最後の方に私の好きな歌でGARNET CRO
Wさんの「夏の幻」の歌詞掻い摘んだところがあります。

真実の相愛

「…！新一は？」

ベッドから飛び起きて居間を見渡す…

「私、昨日どうしたんだろ…」

「蘭！飯！コナンは昨日帰ってきたのか？」

蘭は今の状況を徐々に理解した…

もうコナンには会えない、ということも…

待ち続けた新一とこれからは肩を並べて歩けるといいうことも…

蘭は妙にすがすがしい気分になった…

コナンという人物にはもう二度と会えない寂しさもあるが、これからもずっと変わらずにそばにいたことがなによりの幸せだったから。

「お父さん達と別れるのが辛いからって、嘘ついてたみたい…昨日両親と一緒に空港に向かったよ…」

「なにい？」

小五郎は耳を疑った。いくら毎度毎度捜査に首を突っ込んでくる生意気なガキだと言っても突然いなくなれると心もとないのだ。

「私、ちょっと急いであるから、朝ご飯はポア口で済まして！梓さん

には言っとく！」

そう言つて蘭はしわのない制服に身を包んで鞆を持って勢いよくドアを開け、階段を駆け下りた。

…新一…新一！

その言葉だけが蘭を支配する。

工藤邸に到着

走ったことで息が切れているうえに、新一に会えるという胸の高鳴りもあつて、蘭の心臓は爆発寸前だ。

ただ、現在時刻7時…

「ちよつと早すぎたかな？」

まだ寝ているよね…

蘭は息を整えたあと、起こさないように、とゆっくりドアを開けた…

「あ、服部君…」

まず視界に入ってきた人…

規則正しい寝息を立ててまだ気持ちよく眠っているようだ。

「やっぱり…二人が起きる前にご飯つくっておこう。」

食材がこの屋敷に存在するか否か…

そんなことを考えながら落ち着いてドアを開ける。

…！

「新一いないじゃない…」

隣のソファーには新一は眠っていないなかった

「…どっ…」

「新一…どこにいるの？」

声を潜めながら愛しい人を探す蘭…。

「また…いなくなっちゃったの？」

蘭は美しいその瞳に涙をためた…

「…もう離れねえって言っただろ？」

「新一！」

背後から聞こえた優しい声…
蘭が待ち望んでいたあの声…

すぐに後ろを振り向いた途端、新一は蘭を力いっぱい抱きしめた…

「し…しん…い…ち？」

「一分だけでいいから…お願い…」

「…うん」

返事をして蘭も新一を強く抱きしめた。

どれだけ時間が過ぎただろうか…

二人は向かい合った。

そして自然に二人の唇が触れ合った…。

至福の時…これからは永遠に続くと、二人は確信した。

蘭は待っていた。

ずーっと新一を、愛する人を。

新一は守っていた。

そばで蘭を、最愛の人を。

二人は近づくほど遠く感じて不安になっていた。

今となればそんなのは笑い話だ。近くにいるのに気づかなかつたのだから。

真実の相愛（後書き）

自分でも納得がいかないのですが、短編に集中したいのでこれで完結させてしまいます。中途半端でごめんなさい。本当はこれから詳しいことが分かっていったり、また新一と平次の友情とか新蘭の結婚とか書きたかったのですが、私には連載は向いていないと思ったのでこれで…メッセージや評価で続きが読みだいかあれば言うてください。短編で番外編として書かせていただきます。まあそんな要望が無くても気が向いたら書くかもしれません…短編の方はほぼ新蘭ストーリーで書くつもりなので是非読んでください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0562h/>

truth ~ 工藤新一の試練 ~

2010年10月12日03時38分発行